

日本史上三大ミステリー 本能寺の変について

札幌市医師会
札幌 i 内科クリニック

さいとう やすひろ
斉藤 泰博

今年4月に発見された邪馬台国と同じ時期の有力者とみられる石棺墓が見つかった佐賀県・吉野ヶ里遺跡からは、残念ながら墓内に人骨や副葬品は見つからなかった。日本史三大ミステリーといえ、邪馬台国はどこにあったのか、本能寺の変はなぜ起こったのか、坂本龍馬暗殺の謎のことを一般的に言うらしい。

本当であれば魏志倭人伝を基に、邪馬台国はどこにあったのかについての自説を述べたかったが、今回は誌面上の制約があり断念。次稿以降に委ねたいと思う。本稿では光秀謀反について自分なりの説を述べたいと思う。

光秀最後の言葉は、「順逆二門に無し 大道心源に徹す 五十五年の夢 覚め来れば 一元に帰す 心しらぬ 人は何とも言はばいへ 身をも惜まじ 名をも惜まじ」であった。ということは、それなりの年齢で謀反を起こしたことになる。現在では、55歳はまだまだこれからという感じであるが、当時は人生50年、とっくに隠居していてもおかしくない。最近ではNHKの大河ドラマ「麒麟がくる」で注目された光秀であるが、出自やその生い立ち、そしてどのようにして織田信長に仕官するようになったのか、謎の多い人物でもある。一時は越前朝倉家にも身を寄せ、来るべき時を待っていたのかもしれない。当時から武芸のみならず、教養人、政治家としても超一流であったことは疑うべくもない。それが証拠には、朝廷との交渉事は、朝廷作法を熟知していた光秀をおいていなかったことから伺える。

光秀の武士としての能力も、あちらこちらに転戦させられながらも約4年かけて丹波を征服し、信長からして「丹波の国での光秀の働きは天下の面目を施した」と絶賛され、丹波を領地として与えられたことから伺える。一方で、1581年に京都で行われた御馬揃えにおいて運営の責任者になるなど、信長から絶大な信頼を受け、光秀はこの信長からの厚遇に対し、「一族家臣は末代に至るまで信長様への奉公を忘れてはならない」と文章を書き残しているほどであるから、この時点で叛意の兆候など垣間みれない。では、こういった関係のふたりが、何故本能寺の変という大きなミステリーを残したのであろうか？

わたしは、信長がきわめて革新的かつ合理的な性格であり、これまでの功績よりも今後どの程度の働きができるかで、人の価値を判断していったことが大きいと思っている。スポーツに例えると、抜群の結果を残している有能な選手に対しては三顧の礼を持って多額の報酬を出して迎えるが、結果を出さなければ戦力外通告を容赦なく突きつける。そんなイメージだろうか？ わたしも本能寺の変の原因に関しては、多くの書籍等から知識を得ている。要約すると、

1. 信長への怨恨説 2. 野望説 3. 朝廷や将軍

による黒幕説 4. 豊臣秀吉や徳川家康との共謀説、等々である。

1の怨恨説。家康饗応の折に多くの家臣の面前で罵倒された、「きんか頭」といってからかわれたことがプライドの高い光秀には許せなかったとするものであるが、秀吉を始め多くの家臣が同様の扱いを受けており、動機としては少し弱すぎる。

2の野望説。いくら下剋上の世とはいえ、信長に取り立てられた経緯や、クーデター後のお粗末な対応からは、虎視眈々と準備していたとは言いがたい。

3の黒幕説は話としては興味深い、あれだけ頭脳明晰な光秀である。秘密裡にもそれなりに準備万端の手筈をするはずである。

4の秀吉や家康との共謀説などに至っては、笑止千万である。

私見となるが、わたしは光秀の将来への不安、疲れ果てた恐怖心が本能寺の変につながったのではないかとみている。光秀は年齢的にも体力的にも賞味期限が迫っている。というよりも、とうに過ぎている、と信長が考えていても不思議ではない。そして、光秀はかつての織田家の重臣であった林秀貞や佐久間信盛といった重臣たちがどのように扱われたかも知っている。もともと、水と油、考え方や理念も大きく異なる光秀と信長、いつかはXデーが来ることを、お互い予見していたとしても不思議ではない。中国攻めを指示された時点で、かつては下に見ていた秀吉（中国方面軍管区司令長官）の、その下に就くことになってしまったことは、プライドの高い光秀にとっては耐えがたいことだったに違いない。まさにその時、過去のいろいろな出来事がフラッシュバックし、心の中にマグマのような熱い塊として沸点に達したのかもしれない。所詮光秀とて人の子。主君に反旗を翻すことに大いに悩みもしたのかもしれないが、戦国武士としては千載一遇、絶好のチャンスが訪れた。信長の主だった重臣たちは全国各地で転戦中、一方の信長は少人数で本能寺入り。愛宕神社で大吉がでるまでおみくじを引き続けた光秀。これから自分が行なうクーデターへの逡巡と、正当化という大義名分で天から背中を押してもらいたい気持ちもあったのだろう。信長とはまったく異なる合理性を持った光秀にしても、最後は神頼み。少なくともわたしには、光秀の感情と周囲の情勢とが凶らずも一点に交わったからこそその決起であったと見ている。

その後の結果はご存じのとおり。事を起こしてから頼った盟友でもあり、娘の嫁ぎ先である細川藤孝親子にも袖にされている有様から、光秀の感情が普段の冷静さを上回ったとしか考えられない。人間の心理、行動なんて、後世の人が思うほど複雑ではなく、案外単純だったりするのではないかとわたしは思っている。そして、わたしがこのような考えや推論に至ったのは、自分が齢を重ねたからに他ならない。真実は小説より奇なりともいわれるが、本能寺の変はその逆で、きわめて単純な動機であるが故にミステリーとなってしまったのではないかとわたしは思っている。そして、わたしの説（陳説？）を持って真実が明らかになったわけではない。それ故に歴史にはロマンがある。

もしも歴史にご興味のある先生がいらっしゃれば、歴史談義を酒の肴にでもして、その辺の居酒屋で一杯やりませんか。ぜひお誘いくださいませ。